

ムガル宮廷頓智話「アクバル・ビールバル」研究 (1)

—小咄と史実の対照—

今村 泰也

1. はじめに

「アクバル・ビールバル」(Akbar Bīrbal) は北インドで最もよく知られ、今なお人気のある頓智話である。ムガル朝第 3 代皇帝アクバル (Akbar、在位 1556-1605) は 50 年の長きにわたって帝国を統治・拡大し、その寛容と融和の政策によって多彩な文学芸術活動を生み出した。アクバルが人種、宗教、カーストを超えて有能な人材を広く集め、これを愛したことはたいへん有名である。

その綺羅星の如き人材群のなかにあつて、とりわけ傑出した人物が後に「アクバル帝の九宝 (ナヴ・ラトナ)」と呼ばれた。そのうち「最も輝ける宝石」¹とされたのがラージャー・ビールバル (Rājā Bīrbal) である。特に並ぶもののないウィットとユーモアは圧倒的な人気があつた。彼は智慧者として知られ、アクバルとビールバルの関係はアレキサンダー大王とアリストテレスの関係にも比せられる。

本稿ではこれまで本格的に研究されることのなかつた²「アクバル・ビールバル」の小咄を史実と対照することによって、(i) 「アクバル・ビールバル」の小咄がまったくの創作というわけではなく、フィクションの中にも当時の史実やアクバルの言動が反映していることを明らかにし、(ii) ビールバルの実像およびアクバルとの関係に迫る。

本稿と同じ趣旨の論考に坂田 [1994] があるが、坂田自身が述べているように「史実」に迫る資料の面が著しく少ない。本稿は、アクバルの

¹ Sinha [1980: 157]

² 坂田 [1994: 122] はその理由として、「アクバル・ビールバル」が本格昔話ではなく、笑話の一部であることなど 3 つの理由を挙げている。

側近アブル・ファズル³や宮廷史家バダーウーニー⁴が著した史書⁵、ムガル朝時代にインドに滞在したヨーロッパ人の記録などの史料文献、さらにアクバル、ビールバル、ムガル朝に関する近年の研究文献を参照し、小咄の背景にある史実を探る（この作業にあたっては、Sinha [1980]、近藤 [2003] の精密な研究に負うところが大きい）。

本稿の構成は次の通りである。2 節で頓智話「アクバル・ビールバル」について概観し、3 節でビールバルの生涯を略述する。4 節でヒンディー語の刊本から小咄を訳出し、関連する史実を示す。5 節で本稿のまとめを行う。

2. 「アクバル・ビールバル」概観

「アクバル・ビールバル」はアクバルの宮廷を舞台にした頓智話・笑話である。短いものは数行、長くても4、5 ページの小咄が集められ（あるいは編者によって手が増えられ）、*Akbar Bīrbal ke Latīfe*『アクバル・ビールバルの笑話』、*Bīrbal kī Sūjhbūjh*『ビールバルの才智』などのタイトルで書店や露店で売られている⁶。最近では英訳本も増えた（Amazon や Google ブックスなどを参照）。邦訳は田中・坂田 [1983] に多数収録されているほか、インドの昔話や民話を集めた本⁷にいくつか紹介されている。

³ Abu'l-Fazl (1551-1602) 思想家・歴史家。1574 年にアクバルの宮廷に入り、*Akbar Nāma*『アクバル・ナーマ』（アクバル年代記）、*Ā'in-i-Akbarī*『アーイーネ・アクバリ』(アクバル制度集) を著した。「九宝」の1人。

⁴ Abd al-Qādir Badā'ūnī (1540-1615) アクバルとアブル・ファズルの折衷主義的宗教政策に批判的な見方をし、アクバルと親密な（ヒンドゥー教徒の）ビールバルを苦々しく思っていた。主著 *Muntakhab al-Tawārīkh*『歴史の精髓』（1596 年）ではビールバルをしばしば「犬」と呼んでいる。

⁵ 原文はペルシア語であるが、本稿では詳細な注が付された英訳を参照する。

⁶ 生きた伝承としての「語り」については坂田 [1981] を参照。

⁷ 坂田・前田 [1983]、ラーマーヌジャン [1995] など。

「アクバル・ビールバル」の小咄はまた、インドの小学校の教科書⁸のほか、ヒンディー語学習者用の教科書⁹にも収められている。

このようにたいへん有名で人気のある「アクバル・ビールバル」であるが、そのほとんどは後世の創作 [Sarin 2003: 70] とされている。例えば、英訳本の冒頭に収められている「アクバルとビールバルの出会い」(How They Met) という話¹⁰では、狩に出かけて道に迷ったアクバルがマヘーシュという利発な少年 (後のビールバル) に会う。アクバルは少年の頭の良さと物怖じしない態度に感心して皇帝の印章が刻まれた指輪を渡し、少年が大人になって学問を修めたら指輪を持って自分を訪ねるように言う。しかし、この話は明らかに創作で、実際にはビールバルはアクバルより 14 歳年上であった¹¹。

また、小咄の中でビールバルはしばしば「宰相」や「大臣」として描かれているがこれも事実ではない。高位の官位(マンサブ)2000 を賜り、時折、特別な任務を受けて派遣されたことはあるが、ビールバルが政府の要職に就いた記録はない。

こうしたことはビールバルがあまりにも有名であったがゆえに史実よりも伝承が先行したためであると考えられる。「アクバル・ビールバル」は語り継がれていくなかでさまざまな類話やヴァージョンが生まれ、現在では少なくとも 200 を超える小咄が活字になっている。

「アクバル・ビールバル」の小咄は大まかに以下のように分類できる。

(1) アクバルの珍問・奇問、謎掛けにビールバルが頓智で答える話。

⁸ 詳細は坂田 [1994, 2004, 2007] を参照。なお、筆者 (今村) はかつてデリーの中高一貫校に勤務していたが、英語の副読本 [Nath 1995] にも「アクバル・ビールバル」の小咄が収録されていた。

⁹ 坂田 [1986: 64]、Kachru and Pandharipande [1988: Part II, 9-15] など。

¹⁰ Mukundan [1992: 3-6]

¹¹ 「アクバル・ビールバル」の諸刊本の表紙には小咄の 1 場面が描かれているが、多くの場合、ビールバルはアクバルより若く描かれており、インド人の間にも誤解が見られる。

- (2) アクバルの無理難題をビールバルが見事に解決する話。
- (3) アクバルの言動に対し、ビールバルが当意即妙の皮肉で切り返す話。
- (4) 勇気をもって主君を諫める忠臣ビールバルの話。
- (5) アクバルの不興を買って追放されたビールバルが復帰する話。
- (6) 人々の争いを智慧で裁き、弱者を助ける心優しいビールバルの話。
- (7) ビールバルに嫉妬する廷臣たちの挑戦とこれを打ち負かすビールバルの話。
- (8) ユーモアいっぱいのビールバルとその家族の話。

以上は筆者の仮分類であり、アールネ・トンプソンの話型索引 (Aarne-Thompson Type Index、AT 番号) などによる分類は今後の課題としたい。

3. ラージャー・ビールバルについて

本節では Sinha [1980]、Agrawal [2001] の記述を基にビールバルの生涯を略述する。

ビールバルは本名をマヘーシュ・ダース (Maheś Dās) と言い、1528 年にカルピー (Kālpi)¹² の貧しいバラモン家に生まれた。父ガンガー・ダース、母アナバ・デーヴィーの間に 3 男として誕生したが、幼少のころ父親を失い、早期の教育は母方の祖父のもとで受けた。言語はヒンディー語、サンスクリット語、ペルシア語を学び、詩と音楽に特別な才能を見せた。これに加え、彼は頓智の才に秀でていた。

リーワーのラージャー・ラーム・チャンドラ (Rājā Rām Candra) の宮廷に仕えた後、ジャイプルのラージャー・バグワント・ダース (Rājā Bhagwant Dās) の宮廷詩人を務め、ほどなく彼の名声は内外に広まり、アクバル皇帝の注目を引いた。こうして 1562 年にアクバルの宮廷に入ることとなった。

¹² 現在のウツタル・プラデーシュ州ジャールラウン県の町。

マヘーシュは詩人、音楽家であったばかりでなく、優れた語り手、会話の達人であったため、すぐにアクバルの気に入るところとなり、1572年に *Kavi Rāy* (詩人の王) の称号を与えられた。また、1574年には派遣先のムルターンで軍事的才能を発揮し、これによって *Bīrbal* (勇猛な力、すなわち勇者) の名を賜った。さらにジャーギール (領地)¹³としてナガルコートを与えられ、*Rājā* (王) の称号を授与された。

こうして彼はいくつもの称号を得たが、人気が高まるにつれ「ビールバル」の名が定着し、本名に取って代わった。

ビールバルは正義の人でもあった。人々の幸せに心を砕き、彼の誠実さと公正さ、職務に対する献身、そして皇帝に対する忠誠はアクバルに絶賛された。

1586年、ビールバルはアフガーン遠征 (ユースフザイ族鎮定) の途上で命を落とした。ビールバルの訃報に接したアクバルは悲しみのあまり2日間食事をとらなかった¹⁴。バダーウーニーも「いかなる貴族の死の時も陛下がこれほど悲しまれたことはなかった」¹⁵と記している。戦死までの25年間、ビールバルはアクバルと共にあり、アクバルはビールバルの人柄と才能をだれよりも愛した¹⁶。

4. 小咄と史実の対照

本節では「アクバルの宮廷」(4.1節)、「ムガル朝時代の社会と文化」(4.2節)、「アクバルとビールバルの友情」(4.3節)、「ビールバルの家族」(4.4節)をトピックとして、「アクバル・ビールバル」の小咄を訳

¹³ 現金給与のかわりにそこからの租税の徴収権を授与された土地。給与地。

¹⁴ *Akbar Nāma*, (Beveridge) Vol. III, p. 732.

¹⁵ *Muntakhab al-Tawārikh* (Lowe), Vol. II, p. 362.

¹⁶ バダーウーニーは、アクバルとビールバルは一心同体だったと述べている。

“(Bīrbal) was honored with the distinction of becoming the Emperor’s confidant, and it became a case of ‘thy flesh is my flesh and thy blood my blood.’” [*Muntakhab al-Tawārikh* (Lowe), Vol. II, p. 164]

出し、それに関連する史実を示す。「アクバル・ビールバル」は以下の刊本を使用した。

- (1) Viśwanāth (ed), n.d., *Bīrbal kī Sūjhbūjh*, New Delhi: Vishv Vijay PVT LTD. 『ビールバルの才智』(144 頁、119 話所収)
- (2) Dharampol Bāriyā (ed.), 2001, *Akbar Bīrbal ke Latīfe*, Delhi: Manoj Publications. 『アクバル・ビールバルの笑話』(176 頁、117 話所収)
- (3) Siddhārth, n.d., *Akbar Bīrbal kī Cakallas*, Meerut: Dheeraj Pocket Books. 『アクバル・ビールバルの冗談』(141 頁、99 話所収)
- (4) Anonymous, 2000, *Akbar Bīrbal Vinod*, New Delhi: Diamond Pocket Books. 『アクバル・ビールバルの愉楽譚』(120 頁、95 話所収)

4.1 アクバルの宮廷

小咄 1 : 乳兄弟

アクバルは乳母の乳を飲んで育ちました。乳母の息子は皇帝の乳兄弟でした。ラージャスターン地方では乳兄弟も「兄弟」すなわち「乳母の息子(兄弟)」と言います。アクバルは自分の乳兄弟を特別に優遇し、この処遇に皆が嫉妬していました。ビールバルも例外ではありませんでした。

ある日のこと、アクバルがビールバルに言いました。

「ビールバル、これが余の乳兄弟であるように、そなたにも同じような兄弟がだれかおるか」

「はい、おります」

「なぜ、その者を宮廷へ連れて来ないのじゃ」

「マハーラージ (大王様)、その者はまだとても小さいのでございます。

宮廷に参上するには及びません」

「いや、心配いらん。明日、その者を連れてまいれ」

「かしこまりました」

皇帝の命令に従い、翌日ビールバルは自分の飼っている牛の子をきれいに飾りつけて宮廷へ連れて行きました。

「ジャハーンパナー（世界の守護者）、私の乳兄弟が参りました」

皇帝は子牛を見て聞きました。

「その子牛がそなたの乳兄弟と申すのか」

「はい、これでございます。これは私が乳を飲んでる牛の子どもでございます」

皇帝はビールバルの賢さを目のあたりにして喜びました。それでも自分の乳兄弟への優遇はやめませんでした。

[*Bīrbal kī Sūjhbūjh*: 84-85, “Dūdh Bhār”]

【史実 1】 アクバル時代の終わりごろ、2人の筆頭貴族が臣下に与えられる最高ランクの官位 7000 を賜った¹⁷。1人はアンベール王のラージャー・マーン・スィング (Rājā Mān Singh) で、もう1人がアクバルの乳兄弟ミールザー・アズィーズ・コーカ (Mīrzā Azīz Koka, 1542-1624、称号は Khān-i-Āzam (最高ハーン)) であった。彼は 1574 年以降、非常設となった宰相職 (ワキール) に任命され (1594-1602 在任)、父のシャムスディーン・ムハンマド・ハーン (1562 年宰相) と 2 代にわたってアクバルの宰相を務めた。シャムスディーンの子マーハム・アナガがアクバルの乳母であったことからアズィーズとアクバルは乳兄弟になった。

アクバルはアズィーズの度重なる無遠慮な振る舞いにも、これを罰することはほとんどなく、「余とアズィーズの間には渡ることのできない乳

¹⁷ チャンドラ [1999: 245-246]

の河が流れている」¹⁸と語っていた。

*

小咄 2：閣下も私の命令に……

ある日のこと、宰相アブル・ファズル¹⁹が皇帝の御前でビールバルに言いました。

「ビールバル、陛下はそなたを豚と犬の担当に任命なされたぞ」

「それはすばらしい。それでは閣下も私の命令に従わねばなりませんな」
これを聞くや皇帝は爆笑し、宰相は恥ずかしくなりました。

[*Bīrbal kī Sūjhbūjh*: 135, “Tum ko bhī Merī Ājñā men Rahnā Paregā”]

【史実 2】 1582 年のこと、各種物品・動物の価格統制と売買の取り締まりおよび監督任務が貴族・高官に対して分担された。『アクバル・ナーマ』には 21 人の名前とその担当が列記されており、ビールバルは牛と水牛の担当に、アブル・ファズルは毛糸の担当に任命された²⁰。

当該箇所に「豚と犬の担当」の記載はないが（豚も犬もイスラーム教では不浄な動物とされている）、アクバルはその優れた性質のために犬をたいへん好み、諸国から犬を輸入した。カーブル産、特にハザーラ地方（ラーワルピンディーの北）の犬は良質とされ、アクバルは犬に飾りをつけ、名前もつけたという²¹。

*

小咄 3：あまのじゃく

ある日のこと、皇帝はあるバラモンに激怒し、絞首刑を言い渡しました。ちょうどその時、ビールバルがやって来ました。皇帝はきっとビールバルが仲裁に入るだろうと思い、ビールバルが来るや、

¹⁸ *Āīn-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, p. 343.

¹⁹ アブル・ファズルが宰相の地位に就いた史実はないが、皇帝の側近としてアクバルに多大な影響を与えた。

²⁰ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 585.

²¹ *Āīn-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, p. 301.

「ビールバル、このパンディット（学者）の件については何も申すな。
何か申せば、余はその逆のことをするぞ」
と釘を刺しました。

ビールバルは言いました。

「陛下、どうぞこの者を絞首刑に処して下さい」

皇帝はそのバラモンを釈放しました。

[*Akbar Bīrbal Vinod*: 89, “Uṭṭā Javāb”]

【史実 3】 1580 年から 82 年までイエズス会の使節としてアクバルの宮廷に滞在したポルトガル人の神父モンセラータ（1536-1600）はアクバルの性格について、「王は激し易い性格であるが、その怒りはすぐ鎮まる。性格的には心の寛い優しい人物である」と述べ、敵陣へ脱走を試みた 12 人の兵がアクバルの前に連行された時の模様を紹介している。

この兵を裁いたのは王〔アクバル〕自身であったが、一部の者はさらに詳しく審問するため牢へ入れるよう命じ、他の者は裏切行為と脱走を積極的に行なった者として死刑に処するよう命じた。するとそのなかの一人で死刑を命じられていた兵士が刑執行官に引き立てられようとしていたとき、許可を求めて王にこのような言葉を言った、「王よ、わたくしを絞首刑に処さぬようお命じください。実は、わたくしは生まれつきある事を巧みに行なう才能にたいへん恵まれているのです。「よろしい。あわれなお前にいったいなにができるというのか」（と王が訊いた。「歌が上手にうたえます」（と兵は答えた。「よし、ならばうたってみよ」。哀れなその男はうたい始めたが、その声たるや、まったく調子はずれでひどいものであった。このためどの人も笑い出し、がやがや話しはじめた。王自身も笑うのをこらえかねていた。死刑を宣告されていた兵士はそれに気づくとふたたびこう言った、「このような不様な歌いぶりをお赦し

ください。王様お抱えのこの警備の人びとが乱暴な扱いをしながら暑くて埃っぽい道を通ってわたくしを連れて来たからです。しかも殴りつけながら。だから口のなかへ土埃がいっぱい入り声が嘎れてしまったのです。声が満足に出ないのでこれいじょう上手に歌うことはできません」。王はこの当を得た、しかもたいへんユーモラスな言葉を聞くと彼とその仲間に科す予定であった刑罰を取り消し罪を赦した²²。

「アクバル・ビールバル」にはアクバルから死刑を宣告された人をビールバルが助ける話、あるいはビールバルが悪人を懲らしめる話が数多く見られる。モンセラテの記述からもアクバルはユーモアを解した皇帝であり、小咄のようなやりとり（ビールバルによる仲裁）があった可能性は高い。

*

小咄4：最も難しいこと

ある日のこと、ビールバルが宮廷に遅れて到着しました。

アクバルが、

「ビールバル、どうということじゃ！ 今日は何ゆえ遅れて参った」

と尋ねると、ビールバルは、

「ジャハーンパナー（世界の守護者）、今日、私は子供の面倒を見なければならなかったのでございます」

と答えました。

皇帝はこれを聞いてたいそう驚き、

「子供の世話などたいしたことではあるまい」

と言いました。

「ジャハーンパナー（世界の守護者）、子供の面倒を見ることは最も難し

²² モンセラテ [1984: 191-192]

いことにございます。この災難に見舞われますと、何事も時間通りにはまいりません」

「ビールバル、子供をあやすことは最もたやすいことじゃ。子供の手に何か食べ物をやるか、おもちゃを与えてみい。それで一件落着じゃ」

「陛下はご経験がおありではないので、子供の世話をたやすいとお感じになるのです。実際おやりになってみれば、私の話がよくおわかりになりましょう。では、私が幼い子供の役をいたしますから、陛下は私をあやしてみして下さいませ」

皇帝はすぐに乗り気になりました。

ビールバルは幼い子供のようにおいおい泣き始めました。

「パパー、ミルクが欲しいよー」

皇帝はただちに牛乳を持ってこさせました。

牛乳を飲んだ後、ビールバルは言いました。

「今度はサトウキビをかみかみするー」

皇帝はサトウキビを持ってこさせ、それを細切れにさせました。ところが、ビールバルはサトウキビに触れもせず、泣いてばかりいました。ビールバルは泣きながら、

「パパー、ぼく、長いサトウキビが欲しいの」

と言って泣き続けました。皇帝は途方に暮れて、召使いに別のサトウキビを持ってこさせました。しかし、子供になりきったビールバルはなおも泣きながら、

「このサトウキビじゃやなの。ぼく、さっきのサトウキビの長いのが欲しいの」

と言いました。

これを聞いて皇帝はじりじりして言いました。

「駄々をこねるでない。黙ってかむのじゃ。切ったサトウキビが元通りになるわけがあるまい」

「やだー。あのサトウキビじゃないとやだー」

皇帝はこれを聞いて癩癩を起こしました。

「おい、だれかおらんか。この子供をここから連れて行け」

ビールバルは笑い出しました。

皇帝は子供の面倒を見ることが本当に難しいことだということを認めざるを得ませんでした。

[*Akbar Bīrbal ke Latīfē*: 95, “Sabse Muśkil Kām”]

【史実4】第5代皇帝シャー・ジャハーン（在位 1628-1658）、第6代皇帝アウラングゼーブ（在位 1658-1707）の時代にインドを旅行したイタリア人マヌッチ（1639-1717）の旅行記 *Storia do Mogol or Mogul India 1653-1708* に上の小咄に似た記述が見られる（以下は筆者による要約）。

王〔アクバル〕に遅刻の理由を述べ、子どもを満足させることは難しいと言ったビールバルに、冗談が好きな王子〔長男サリーム、後のジャハーンギール帝〕は子どものまねをするよう命じた。ビールバルはすぐに応じて泣き始め、母乳を欲しがった。女が呼ばれ、ビールバルは女の乳を吸った。それでも満足せず、ビールバルは庭に出て果物と花を求めた。それでも満足せず、旗と飾りを付けた象と馬を行進させるよう要求した。それから金貨を求め、あちこちにばら撒いた。こうしたことをビールバルは幼児のしぐさで行い、王子は大喜びした。

ビールバルの要求はこれで終わらず、雄鶏や鳩などの鳥、ヤギなどの動物に続いて、最後に水牛と牛を求めた。水牛と牛が来ると、その乳を搾るよう命じ、少し飲むと残りを牛の乳房に戻すよう合図した。それは明らかに不可能なことだった。それからビールバルは地面に横たわって泣きわめき、怒った子どものように手足をばたつかせた。だれもビールバルをなだめることができなかった。

ついに王が、そうした不可能な要求は無礼であるとビールバルに

言う、ビールバルは、「陛下、子どもはそういうものであり、それゆえ、子どもを満足させるのは難しいのでございます」と答えた。王はビールバルの賢さを称賛し、次いで「この世で最も気が休まるものは何か」と尋ねた。ビールバルは即座に、「それは父親が息子に抱き締められている時でございます」と返答した²³。

マヌッチがこの話をいつ、だれから聞いたのかは記されていない。また、マヌッチがインドを訪れたのはアクバルの没後 50 年たってからのことで、彼が書き留めたアクバルとビールバルのやりとりは必ずしも史実とは言えない（ビールバルの行動も冗談にしては度が過ぎている）。しかし、逆に言えば、アクバルの没後 50 年～100 年後には上記のような「アクバル・ビールバル」の原型がすでに存在していたということであり、マヌッチの記録は小咄の形成過程を考える上でもたいへん重要である²⁴。

4.2 ムガル朝時代の社会と文化

小咄 5：象を賜るか、象に踏まれるか

ある晩のこと、アクバルは前歯 1 本を残して歯が全部抜け落ちてしまった夢を見ました。皇帝はこの夢でとても不安になり、一晩中眠れませ

²³ *Storia do Mogor* (Irvine), Vol. III, pp. 277-278.

²⁴ マヌッチはもう 1 つ、シャー・ジャハーン時代の話記録している [*Storia do Mogor* (Irvine), Vol. I, pp. 182-183]。シャー・ジャハーン帝は大の音楽好きで、お気に入りの音楽家がいた。しかし、宮殿の門番は強欲で、役人以外の通行者に賄賂を要求した。その音楽家も毎回、何がしかをあげるか、(皇帝から賜る褒美を) あげることを約束するまで門番に引き止められ困っていた。ある時のこと、皇帝は演奏の褒美として音楽家に 1000 ルピー与えるよう命じたが、これを聞いて音楽家は涙を流し、胸を叩いて嘆き悲しんだ。そして、1000 ルピーの代わりに鞭打ち 1000 回を賜るよう懇願した。皇帝はその訳を問いただし、門番の不正が発覚した。その後、当直の門番 25 人が 1000 回の鞭打ちを受けた。これと同じモチーフは「アクバル・ビールバル」のほか、インドの民話にも見られる。

んでした。夜が明けるとすぐに高名な占星術師たちが夢占いのために呼ばれました。

ある占い師が言いました。

「その夢は不幸の前兆でございます。陛下の御家族全員が陛下より先にお亡くなりになるという意味でございます」

これを聞いて皇帝はその占い師に激怒し、

「この占い師を連れて行き、象の足元に放り出せ²⁵」

と侍者に命じました。

しばらくしてビールバルがやって来ると、皇帝はビールバルにも夢の意味を尋ねました。

ビールバルは恭しく答えました。

「その夢の意味は明々白々、陛下のお身内で陛下以上に長命を授かるお方は1人もいらっしゃらないということでございます」

占い師とビールバルの言っていることは同じでした。その違いはビールバルが賢明に答えたということだけでした。ビールバルは返事に喜んだ皇帝から褒美に象をもらいましたが、占い師は耳障りな真実を口にしたため、褒美どころか象に踏まれて命を落とすはめになりました。

[*Bīrbal kī Sūjhbūjhī*: 38, “Bāt’hi Hāthī Pāie, Bāt’hi Hāthī Pānv”]

【史実 5】 アウラングゼーブ時代にインドに滞在したフランス人医師ベルニエ（1622-1688）の記録からインドにおいて占星術がどれほど重要で幅を利かしていたかがうかがえる。

アジア人は大抵、占星術の虜になっていて、この地上に起きる出来事で、天上に書かれていないものは一つもない（これがよく聞く彼

²⁵ 犯罪者を象で踏み殺すのはムガル朝時代に行われた死刑執行方法の1つ。このほかに絞首、斬首、串刺し、屋上からの投下などの方法があった[Sangar 1998: 36]。

らの言い方だ)と信じているほどだ。何事につけ、占星術師の意見をきく。両軍が戦闘準備を整えた時も、占星術師がサイド〔縁起の良い時間、吉祥の時間〕を捉える、つまり、戦闘を開始するのに好適で幸先のよい瞬間を求め、決定しないうちは、戦わぬように十分注意する。こういうわけだから、将軍を選んだり、結婚を急いだり、旅行を始める場合はもとより、どんな些細なことをするにも、奴隷を買うにも、新しい衣服を着るにも、何から何まで占星術師ど
ののご判定なしには行なわれない。これは信じ難いほどの障害となり、非常に重大な結果を招くことさえあるので、どうしてこの習慣がこれほど長く存続できたのか分からない²⁶。

インドでは夢占いも遙か昔から行なわれてきた。アクバルは夢占いについて、「夢判断は吉凶占いの世界に属す。この故に、夢は善良な考え方をもつ学者に対して以外は、それが吉祥をもたらすまで明かさないのでよい」²⁷と述べている。

上の小咄の夢占いを史実に照らしてみると、アクバルは1605年に62歳で亡くなったが、3人の皇子のうち次男ムラードが1599年に、3男ダーニヤールが1604年に深酒のため亡くなっている。また、1604年にはアクバルの実母ハミーダ・バーヌー・ベীগムも亡くなった。さらに、「九宝」に挙げられるアクバルの重臣・側近の多くもアクバルの晩年に相次いで亡くなった。そうした意味で、小咄の夢占いはかなり当たっていると言える。

*

小咄6：灯台下暗し

ある日のこと、アクバルとビールバルが宮殿の高殿に座って日の出を見ていると、叫び声がして2人の注意を引きました。声がした方を見下

²⁶ ベルニエ [2001 (1): 211-212]

²⁷ *Ā'in-i-Akbarī*(Jarrett), Vol. III, p. 444. 訳文は近藤 [2003: 402] によった。

ろすと、追い剥ぎの一味が旅人の金品を奪って逃げて行き、哀れな旅人がおいおいと泣き叫んでいるのが見えました。

旅人は皇帝を見上げて言いました。

「アンヌダーター（穀物の施与者）、陛下のご前で追い剥ぎどもに襲われました。どうか、お助け下さい」

皇帝はその貧しい男をたいそう気の毒に思い、追い剥ぎを捕えるため直ちに警吏を差し向けました。しかし、追い剥ぎは既に逃げ失せてしまい、警吏は落胆しながら手ぶらで戻って来ました。

皇帝は宮殿のそばで強奪が起き、犯人の行方が知れないことが至極残念でした。これはすべて失政の結果と考え、そばに座っていたビールバルに、

「これはすべて失政から起きたことじゃ。そなた、恥ずかしいと思わんのか。目の前でこのような強奪が起きるようでは他所は何をか言わんやじゃ。きっと臣民は盗賊や追い剥ぎどもに苦しんでいようぞ」

と言って、しばらく物思いに沈んでいました。ビールバルが黙っているのを見て、皇帝は言いました。

「ビールバル、何とか言ったらどうじゃ」

ビールバルは穏やかに言いました。

「ジャハーンプナー（世界の守護者）、灯火の下が暗い²⁸のは当たり前でございます。これは陛下も私もどうすることもできません」

ビールバルの当意即妙の返答に皇帝はとても喜びました。このあと皇帝は旅人に金や衣服を与えて送り出しました。

[*Bīrbal kī Sūjhbūjhī*: 7-8, “*Cirāg Tale Andherā*”]

【史実 6】 ここではアクバルの太陽崇拝とムガル朝時代の治安を取り上げる。ビールバルはヴィシュヌ（ヴァイシュナヴァ）派のヒンドゥー教

²⁸ ヒンディー語の諺 (*cirāg tale andherā*)。理想とされる場所や模範とされる人物の矛盾について言う場合に使われる。

徒で熱狂的な太陽崇拝者であった。アクバルはビールバルおよびゾロアスター教の学者の影響で日の出の太陽に礼拝を捧げるようになり²⁹、治世第 25 年 (1580 年) からはこの非イスラーム的な儀式を公然と行うようになった。モンセラテも「王は木材で見事な物見台を組み立てるよう命じ、それを王宮のもっとも高い場所に据えさせると、そこに立って昇る太陽を眺めまた拝しました」³⁰と記している。

次に治安であるが、ムガル朝時代の治安は悪く、街道は危険だった。個人よりも大規模な集団による犯罪が横行し、盗賊は時に街道にはびこり、町を荒らし、地方で強奪を行った。そのためムガル皇帝は彼らに対し厳罰をもって臨み、犯人の探索と処罰および被害者に対する補償を担当する行政官を配置した。

1583 年から 91 年までインドを訪れたイギリス人ラルフ・フィッチは、当時多くの盗賊がいたことを記している。また、モンセラテはスーラトからアクバルの宮廷があるアグラーへ向かう途中、盗賊の集団に遭遇した³¹。

*

小咄 7 : アクバルの『マハーバーラタ』

アクバルは自分の名が永遠に残るような書物が書かれることを望み、『マハーバーラタ』を聞くと³²、それに比肩する『アクバリー・マハー

²⁹ *Ā'in-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, pp.192-193; Sinha [1980: 97-99] ; クロー [2001: 115-116]。バダーウーニーは次のように記している。“The accursed Bīrbal tried to persuade the Emperor, that since the sun gives light to all, and ripens all grain, fruits and products of the earth, and supports the life of mankind, therefore that luminary should be the object of worship and veneration.” [*Muntakhab al-Tawārīkh* (Lowe), Vol. II, p. 268]

³⁰ モンセラテ [1984: 165-166]

³¹ Sangar [1998: 52-53]

³² アクバルが文字を読み書きできなかったことは有名な事実である。アクバルの宮廷では経験を積んだ者が毎日、図書館 (24000 冊の蔵書があった) から本を運び、初めから終わりまでアクバルに読んで聞かせた。アクバルはその日読んだ (聞いた) ページにサインをし、ページ数に応じて読み手に金貨か銀貨の褒

バーラタ』が欲しくなりました。

アクバルが自分の思いをビールバルに打ち明けると、ビールバルは言いました。

「陛下に不可能はございません」

『アクバリー・マハーバーラタ』を書き、本にせよ」

「たやすいことにございます」

「うむ、任せたぞ」

「ですが、これにはかなりの費用がかかりましょう」

「経費は国庫から引き出すがよい」

ビールバルは皇帝から充分な額の金を受け取り、それをアクバル皇帝の事績として善行に使いました。

ビールバルは『アクバリー・マハーバーラタ』の執筆に半年の期間を与えられました。半年後、ビールバルは1束の原稿を持って皇帝のところへ行きました。その原稿は実はただの紙の束で、上下を板の表紙で挟み、絹布に包んで縛ったものでした。

その包みを皇帝の前に置いて、ビールバルは言いました。

「あと少しでございます。本になりましたら、お読みいただきたく存じます」

「うむ、その時見よう。残りを書き上げ、本にせよ」

「陛下、お妃様から少々お話を伺うと完成いたします。『マハーバーラタ』には女性の登場人物もおりますので」

「聞くべきことは妃に尋ねよ」

「かしこまりました」

ビールバルはその紙の束を持って妃のところへ行き、言いました。

美を与えた [*Āṭm-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, p. 110]。モンセラテは、アクバルが相当な知識を得ており、どんなことを訊かれても正確に要領よく答えることができるので、「事情を知らない人はすべて彼が文字を知らないどころか、非常に深い知識と学識をそなえた人物であると判断することであろう」[モンセラテ 1984: 183] と述べている。

「お妃様、皇帝陛下は『マハーバーラタ』の類書を書かせておられます。『マハーバーラタ』にはドラウパディーも登場しますが、彼女には5人の夫³³がおります。お妃様もご自分の5人のご主人様のお名前を少々お聞かせ下さいませ。お1人はもちろん皇帝陛下ですが、ほかの4人のお方を私は存じません。お聞かせ下されば書き入れますが、そうでないと本が完成いたしません」

「ビールバル、何という無礼です。そんな本は火をつけて燃やしてやります」

憤激した妃は即座にその紙の束を取り上げ、侍女に言いつけて燃やさせました。

ビールバルはにんまりしながらその場を立ち去り、皇帝のところへ行って言いました。

「ジャハーンパナー（世界の守護者）、私はあの原稿を完成させるため、お妃様にこう尋ねにまいったのでございます。『ドラウパディーには5人の夫がいましたが、お妃様の5人のご主人様はどなたですか』と。すると教えて下さるどころか、今まで書いた原稿を燃やしておしまいになり、その上、真っ赤になってお怒りになられたのでございます」
なおもビールバルは妃が激怒した理由を話しました。

アクバルはそれを聞いて言いました。

「もうよい！ ビールバル、やめよ。余はそのような本はいらぬ。『アクバリー・マハーバーラタ』は取りやめじゃ」

そして本当に皇帝は『アクバリー・マハーバーラタ』をあきらめたのでした。

[*Akbar Bīrbal kī Cakallas*: 47-49, “Akbarī Mahābhārat”]

【史実 7】 アクバルは古代インドのサンスクリット文学に強い関心を示

³³ パンダヴァ家のユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァの5王子。

し、自身はイスラーム教徒でありながらサンスクリット語の作家を保護した。また、彼の治世においてペルシア語—サンスクリット語辞典が初めて編纂され、翻訳局ではサンスクリット語のほかアラビア語、ギリシア語等の文学、数学、天文学、宗教書など数多くの著作がペルシア語に翻訳された。

1582年の終わりにアクバルは自ら2晩にわたって『マハーバーラタ』の数節をペルシア語に訳し、この仕事をバダーウーニーに命じた。バダーウーニーは苦心の末に18巻のうち2巻を訳し、ほかの巻を筆頭詩人のファイズイー³⁴、ナキーブ・ハーン、ムッラー・シェーリー、スルターン・ハージーらが訳して完成させた。アクバルはこの訳書を *Razmnāma* 『戦記』と呼んだ。『マハーバーラタ』と叙事詩の双璧をなす『ラーマヤナ』も同じメンバーによってペルシア語に訳された³⁵。

『アクバリー・マハーバーラタ』という書物は実在しないが、アブル・ファズルの著した『アクバル・ナーマ』と『アーイーネ・アクバリー』、バダーウーニーの『歴史の精髓』等の史書はそれに代わるものと言えよう³⁶。

4.3 アクバルとビールバルの友情

小咄8：悪魔（シャイターン）の兄弟

バイサーク月、ジェート月³⁷の酷暑のことでした。ラマザーン（断食

³⁴ Abu'l-Faiz Faizī (1547-1595) アブル・ファズルの兄で「九宝」の1人。ペルシア語やアラビア語で多くの作品を残し、その名声はオスマン・トルコ帝国にまで広がっていたと言われる。

³⁵ *Ā'in-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, pp. 110-112. 翻訳の経緯と経過は *Muntakhab al-Tawārīkh*, Vol. II (Lowe), pp. 329-331 が詳しい。バダーウーニーがこの翻訳作業に不満をあらわにしている点も興味深い。

³⁶ アクバルはあくまで史書に強い関心を示し、史書こそ自分自身の栄光を高める最も効果的な手段と考えていた [クロウ2001: 317]。

³⁷ バイサーク月はヒンドゥー暦の第2月、ジェート月は第3月で、西洋暦の4月半ばから6月半ば（北インドで最も暑い時期）に当たる。

月)でもありました。1日の断食を貫くことはアクバル皇帝やムッラー・ドー・ピャーザー³⁸のような人にとっても耐え難いことでした。しかし、信仰の義務であるため続けなければなりませんでした。

ある日の夕方、皇帝はムッラー・ドー・ピャーザーと散策に出かけました。皇帝は散策しながらビールバルの邸へやって来ました。皇帝はビールバルとしばらく一緒にいると気分が晴れやかになり、ムッラー・ドー・ピャーザーとビールバルの掛け合いも楽しめるだろうと思いました。

皇帝の馬がビールバルの邸の前に着いた時、熱風が吹いていました。ビールバルは邸の地下にある暗くて涼しい小部屋で休んでいました。

皇帝がその部屋へやって来て、
「そなた、なぜこんな地下牢のような所におけるのじゃ」と聞きました。

ムッラー・ドー・ピャーザーはすぐに、
「ズィッレー・イラーヒー（神の影）、イスラームの教えによれば、ラマザンの間、悪魔は監禁されているのを陛下はよくご存知でございましょう」

とビールバルに一撃を加えました。

ムッラーはビールバルを悪魔に仕立てたのでした。

皇帝の口もとに笑いが広がりました。しかし、ビールバルも負けていませんでした。

「なるほど！ それでムッラー殿は皇帝陛下を捕まえてここへいらしたわけですね」

これを聞くや、皇帝は腹がよじれるほど笑いました。

[*Akbar Bīrbal kī Cakallasī* 22, “Śaitān kā Bhār”]

【史実 8】 皇帝を自分の邸に迎えることは廷臣にとって最高の榮譽であ

³⁸ Mullā Do Pyāzā (1541-1600)「九宝」の1人に数えられるが詳細は不明。ビールバルの敵役として「アクバル・ビールバル」にしばしば登場する。

った。アクバルは遠征や旅行の行き帰りに臣下の任地を訪れた際、彼らの熱烈な招待に応じることがあった。廷臣は皇帝の来訪を歓迎し、盛大な祝宴を催した。

一例を挙げれば、ミールザー・アズィーズ・コーカ（1571年）、バグワント・ダース（1581年、ラーホール）、トータル・マル（1584年）、ファイズィー（1595年、死の直前の見舞い）、アブドゥル・ラヒーム（1590年）等がこうした訪問の栄に浴した³⁹。皇帝の訪問はこうした大貴族でさえ多くても2度であったが、ビールバルは皇帝の訪問を4度受けたことが記録に残っている。

アクバルがビールバルの邸を初訪問したのは1574年6月のことで、アラーハーバードへ向かう途中、アクバルプルのビールバル邸を訪れ、ビールバルの長年の願いが果たされた⁴⁰。

2度目の訪問は1583年1月、首都ファテール・スィークリーにビールバル邸が完成した時のことであった⁴¹。アブル・ファズルは、「皇帝陛下はビールバルのために石造りの邸宅の建造をお命じになり」、「ラージャー・ビールバルの邸はシャーハンシャー（王の中の王）のご臨席により荘厳された」⁴²と記している。

その翌年の1584年にもビールバルは2度にわたって皇帝訪問の榮譽を受け、饗宴を催した⁴³。

アクバルのビールバルに対する寵愛はこれだけにとどまらず、ファテール・スィークリーの市壁の門（全部で9つ）の1つが「ビールバル門」と名付けられた⁴⁴。

³⁹ Sinha [1980: 108]

⁴⁰ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 617.

⁴¹ 現在「ビールバル邸」(Birbal's House)として残っている2階建ての瀟洒な建物は1571年の建造で、実際には皇妃の住居であったと考えられている。

⁴² *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 587.

⁴³ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 657; Sinha [1980: 108]

⁴⁴ ウッター・プラデーシュ州考古学局のHPでも Birbal's Gate が確認できる。
<http://www.uparchaeology.org/projection_conservation4.htm> 2010.3.21

*

小咄 9：最高の武器

ある時のこと、皇帝が尋ねました。

「ビールバル、最高の武器は何か申してみよ」

「はい、最高の武器とは『冷静心』でございます」

「冷静心？」

「はい、さようでございます」

「矢や剣がなければ冷静心は役に立たぬ」

「ですが、冷静心がなければ武器は少しも役に立ちません。武器は動かさなければ自ら動けないからでございます。武器を動かすには冷静心が必要なのでございます」

皇帝はそれ以上、何も言いませんでした。

数日後、皇帝はビールバルの行く手に 1 頭の獐猛な象を放ちました。その時、ビールバルは武器を持っていませんでした。

ビールバルが近づいてくる狂象を見た時には、象はすぐそばに迫っていました。

ビールバルはうろたえず、ほかの人のように恐怖で気が動転することはありませんでした。

ビールバルはあたりを見回しました。勇気と智慧と冷静心を發揮して、そばにいた 1 匹の雌犬を持ち上げ振り回し、象に向かって投げつけました。犬は象の額に命中しました。

象は犬の爪と歯で引っかかれ、ワンワンという鳴き声におびえてしまいました。

ビールバルは智慧と冷静心で自分の命を救ったのでした。

皇帝はこの様子を黙って見ていました。

ビールバルの冷静心を目の当たりにして皇帝は喜び、最高の武器が冷静心であることを認めたのでした。

[Akbar Bīrbal Vinod: 33-35, “Sabse Barā Hathiyār”]

【史実 9】 小咄では、ビールバルが智慧と冷静心で難を逃れたことになっているが、史実はこれと異なり、ビールバルは危難の際に2度にわたってアクバルに命を救われている。

1583年10月8日、アクバルがイード祭（断食明けの祭り）の祝宴を催した時、音楽家による演奏のほか各種競技が行なわれ、ポロ⁴⁵の試合も開かれた。この試合中にビールバルは突然落馬して気を失い、アクバルがすぐさま駆けつけて自らの息を吹き込んだ。ビールバルはまもなく意識を取り戻し、アクバルに感謝の意を表したという⁴⁶。

特筆すべきはアクバルが自分の命をかえりみずビールバルを救った一件で、1584年のこと、ポロの競技場で闘象⁴⁷の試合が行われていた。殺人象の悪名高いチャーチャルが突然ビールバルに襲いかかり、鼻でビールバルを殺しそうになった。アクバルが自分の馬で象とビールバルの間に駆けつけると、猛り狂った象はアクバルに向かって突進し、人びとは悲鳴を上げた。とその時、アクバルの「ドゥール・バーシュ（下がれ）！」という威厳に満ちた声が轟き、象は圧倒されて立ち止まり、ビールバル

⁴⁵ ポロの起源は極めて古く、サーサーン朝ペルシア時代(224-651)にまで遡る。インドへはトルコ人によって紹介された。奴隸王朝の創始者クトゥブッディーン・アイバクはポロの競技中に落馬して命を落とした(1210年)。ポロは貴族階級で盛んになり、ラージプートはこれを得意とした。ムガル朝時代には大人気のスポーツになり、アクバルはファタープル・スィークリーから1ファルサング(3、4マイル)のカクラウリー村に競技場を設け、皇帝自ら競技に参加した[Ansari 1974: 171]。

ちなみに‘polo’は19世紀以降使われるようになった語で、この当時はチャウガン(caugān)と言った。

⁴⁶ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, pp. 614-615.

⁴⁷ 象を闘わせることは皇帝だけの特権で、まさに「王のスポーツ」であった。ジャハーンギール帝の時代には週5回、シャー・ジャハーン帝の時代には火曜日と土曜日の週2回行なわれた。後宮の女性と貴族・高官は皇帝とともに観戦し、見物人も多数集まった。しかし、闘象は危険を伴うスポーツで、試合中に象が観客を踏みつぶしたり、避難する人々の間で将棋倒しが起きたりした。また、象には乗り手が1人ついて戦闘を促したが、試合中に振り落とされ、死ぬこともあった[Ansari 1974: 168-169]。

はすんでのところで命を救われた⁴⁸。

以上はアクバルがビールバルに対して示した誠意と友情の最高の証である。古来、主君のために命を落とした臣下の例は多いが、臣下を救うために主君自身が身を投じた例は未聞である⁴⁹。

4.4 ビールバルの家族

小咄 10：多少

ある時のこと、ビールバルの 5、6 歳になる娘が父と一緒にアクバル皇帝の宮廷を見に行きました。

皇帝は娘を見て喜び、笑って聞きました。

「話し方を知っておるか」

娘は礼儀正しく、

「多少、心得ております」

と答えました。

皇帝は娘の返事に喜びましたが、話を続けるためにもう 1 度聞きました。

「娘よ、多少とはどういう意味じゃ」

娘は皇帝の方を 1 度見て、それから頭を下げました。そして自分のそばに座っていた幼児を懐に抱いてあやし始めました。

皇帝は娘が答えられないと見て取ると、ビールバルに言いました。

「そなた、この娘がとても賢い返事をすると言って、たびたび褒めておったのか。今日試してみて、そなたの親馬鹿ぶりがはっきりしたぞ」

皇帝が娘の身振りを理解できなかったことを知って、ビールバルは言いました。

「ジャハーンパナー（世界の守護者）、娘は陛下のご質問にお答えいたしましたのに、なぜご不快でいらっしゃるのですか」

⁴⁸ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 654.

⁴⁹ Sinha [1980: 110]

「娘御は黙ってしまったのに、どうやって答えたというのじゃ」

「娘は初めに陛下の方を見て、それから頭を下げました。これは、『陛下は私より年上ですから、私は少しだけお話いたします』という意味でございました。そのあと、娘は小さい子を懐に抱いてかわいがりしました。これは、『私より小さい人にはたくさん話をいたします』という意味だったのでございます」

本当に娘は他ならぬ身振りだけで皇帝に答えたのでした。皇帝は満足して娘の智慧を褒め称えました。

[*Bīrbal kī Sūjhbūjhī*: 13-14, “Thorī Bahut”]

【史実 10】「アクバル・ビールバル」にはしばしばビールバルの娘が登場し、父親ゆずりの頓智に優れた聡明な娘として描かれている。

実際にビールバルには娘が1人あり、たいへん賢く、ヴィシュヌ派に深く帰依していたと伝えられている。父のビールバルとよく宗教談義をし、彼女の勧めによってビールバルはアクバルとヴィシュヌ派聖者の会見の手はずを整えた⁵⁰。

*

小咄 11：ビールバルの愛情

ある時のこと、ビールバルは怒って息子を叩きました。しばらくすると、かわいそうになって言いました。

「よいか、父はお前を愛しているからこそ叩くのだ」

息子は言いました。

「お父さん！ 僕もお父さんの愛情に愛情で応えることができたらなあ！」

[*Akbar Bīrbal Vinod*: 83, “Bīrbal kā Prem”]

⁵⁰ Sinha [1980: 123-124]

【史実 11】さまざまな史料文献からビールバルには息子が 4 人いたことが明らかになっているが、ビールバルのように名声を博し、高い官位を得た者はなかった。『アクバル・ナーマ』および『アーイーネ・アクバリ』には長男のラーラー (Lālā) およびハル・ハル・ラーイ (Har Har Rāy) に関する記述がわずかに見られ⁵¹、当時の文学資料からあとの 2 人の息子カルヤーン・マル (Kalyān Mal)、ディーラーバル (Dhīrābal) の名が知られている⁵²。後者 2 人は当時の詩人や学者の注目を浴びていたようである。

長男のラーラーについては 1 つの逸話が残っている。

ビールバルの死後、アクバルはサンスクリット文学の学者でもあったビールバルの長男に、「ラージャー (王) の死に際して何人のラーニー (王妃) がサティー (寡婦殉死) を行なうか」と尋ねた。ビールバルの息子は、「ヴィールター (勇気)、ウダールター (善意)、ブッディマッター (智慧) の 3 妃はサティーを行い、4 人目のキールティ (名声) はあとに残るでしょう」と答えた。アクバルはこの返答を聞いてたいへん喜んだという⁵³。

ちなみにラーラーはアクバルから官位 200 を賜っていたが、感情が激しくわがままで、浪費がたたって破産した。そして 1601 年にアクバルの宮廷を去り、アラールハーバードへ行ってサリーム皇子に仕えた⁵⁴。

5. まとめ

本稿では「アクバル・ビールバル」の小咄をムガル朝時代の史料文献の記述と対照した。「アクバル・ビールバル」は広く知られた頓智話であ

⁵¹ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, pp. 1122, 1200, 1231; *Āīn-i-Akbarī* (Blochmann), Vol. I, pp. 444, 590. なお、Har Har Rāy は *Sānkrtyāyan* [1957: 36] では *Haramrāy* と記されている。

⁵² Sinha [1980: 123]

⁵³ Sinha [1980: 124]

⁵⁴ *Akbar Nāma* (Beveridge), Vol. III, p. 1200.

るにもかかわらず、本格的な研究はされておらず、小咄と史実を対照するという試みもほとんどなかった。本稿では、宮廷の内側からの記述（アブル・ファズル、バダーウーニー）と外側からの記述（ヨーロッパ人の記録）を参照することにより、小咄の内容を多角的に検証した。その結果、小咄と史実が一致する例（史実 1：乳兄弟の厚遇）もあれば、逆の例（史実 9：ビールバルの救出）もあるが、本稿で取り上げた小咄について言えば、アクバル時代（あるいは後代）の史実やアクバルの言動をよく反映していることが明らかになった。

本稿ではまた、各種文献からビールバルに関する記述を集め、その実像およびアクバルとの関係に迫った。ビールバルは宰相や大臣になったことはなかったが、実際、有能な人物で行政にも携わった（史実 2：牛と水牛の担当）。アクバルの信頼は厚く、その宗教観にも影響を与えた（史実 6：太陽崇拜）。皇帝の 4 度の訪問（史実 8）やビールバル救出（史実 9）の逸話はアクバルとビールバルの関係を最もよく表している。

ムガル朝時代の史料文献はいずれも大部であり、筆者が参照したのはごく一部に過ぎない。史料を丹念に読んでいくなかで、小咄と関連する史実がさらに見つかる可能性が高い。また、本稿でも指摘し、たびたび引用したように、ヨーロッパ人の記録は「アクバル・ビールバル」の形成過程を知る上で貴重な史料である。今後、小咄を収集・整理するとともに、引き続き史実との対照を行いたい。

次稿ではアクバルの宮廷を飾った「九宝」をめぐって小咄を見ていく。

参考文献

<ムガル朝時代の史料文献>

（ペルシア語文献）

Abu'l-Fazl, *Akbar Nāma*, English tr. by H. Beveridge, 3 vols. (reprint, 1989, Delhi: Low Price Publications).

Abu'l-Fazl, *Ā'in-i-Akbarī*, English tr. by H. Blochmann (Vol. I) and

H.S. Jarrett (Vols. II, III), revised edition by D.C. Phillott and J. Sarkar (reprint, 1989, Delhi: Low Price Publications).

Badā'ūnī, Abd al-Qādir, *Muntakhab al-Tawārīkh*, English tr. by G.S.A. Ranking, W.H. Lowe and T.W. Haig, 3 vols. (reprint, 1990, New Delhi: Atlantic Publishers & Distributors).

(ヨーロッパ人の記録)

ベルニエ／関美奈子・倉田信子 (訳)、2001 (1993)、『ムガル帝国誌』
(1)(2)、岩波文庫。

Manucci, Niccolao, *Storia do Mogor or Mogul India 1653-1708*, English tr. and ed. by William Irvine, 4 vols. (reprint, 1996, Delhi: Low Price Publications).

モンセラテ／清水廣一郎・池上岑夫 (訳)、1984、『ムガル帝国誌』(大航海時代叢書第II期5)、岩波書店。

<近年の研究文献>

Agrawal, C. M., 2001, *Hindu Officers under Akbar*, Delhi: Indian Publishers & Distributors.

Ansari, Muhammad Azhar, 1974, *Social Life of the Mughal Emperors (1526-1707)*, Allahabad; New Delhi: Shanti Prakashan.

Bedi, P. S., 1985, *The Mughal Nobility Under Akbar*, Jalandhar: ABS Publications.

チャンドラ、サティーンシュ／小名康之・長島弘 (訳)、1999、『中世インドの歴史』、山川出版社。

クロー、アンドレ／岩永博 (監訳)・杉村裕史 (訳)、2001、『ムガル帝国の興亡』(イスラーム文化叢書3)、法政大学出版局。

石田保昭、1972、『アクバル大帝』、清水書院。

Kachru, Yamuna and Rajeshwari Pandharipande, 1988 (1983),

Intermediate Hindi, Delhi: Motilal Banarsidass.

近藤 治、2003、『ムガル朝インド史の研究』、京都大学学術出版会。

小谷汪之（編）、2007、『南アジア史 2—中世・近世—』（世界歴史大系）、山川出版社。

Nath, Pratibha, 1995, *Indian Folk-Tales and Legends*, New Delhi: Penguin Books India (Puffin Books).

ラーマーヌジャン、A. K.（編）／中島健（訳）、1995、『インドの民話』、青土社。

榎 和良、2001、『『マハーバーラタ』ペルシア訳とアブル・ファズルの君主論』、『印度哲学仏教学』、16、34-48頁。

坂田貞二、1981、「インドの語りと流布本—アクバルとビールバルの頓智話をめぐって—」、『UP』、10 (11)、東京大学出版会、11-15頁。

坂田貞二、1986、『入門ヒンディー語』、鳳書房。

坂田貞二、1994、「ムガル朝のアクバル帝と智将ビールバルをめぐる小咄—虚構の背景にある史実を求めて—」、『拓殖大学論集 人文・自然科学』、2 (2)、115-150頁。

坂田貞二、2004、「インドの小学生用ヒンディー語教科書—言語と文化の教材としての意義—」、『拓殖大学語学研究』、105、149-184頁。

坂田貞二、2007、「ヒンディー語地帯の小学校における言語教育—教授される言語とその教科書を中心に—」、『拓殖大学語学研究』、114、73-113頁。

坂田貞二・前田式子（訳）、1983、『インドの昔話（上）』、春秋社。

Sangar, Satya Prakash, 1998, *Crime and Punishment in Mughal India*, New Delhi: Reliance Publishing House.

Sānkrtyāyan, Rāhul, 1957, *Akbar*, Allahabad: Kitab Mahal.

Sarin, Vohra Amita, 2003, “Birbal”, in Margaret Ann Mills, Peter J. Claus, and Sarah Diamond (eds.), *South Asian folklore: an encyclopedia*, New York; London: Routledge, pp. 69-70.

佐藤正哲・中里成章・水島司、1998、『ムガル帝国から英領インドへ』（世界の歴史 14）、中央公論社。

Siegel, Lee, 1987, *Laughing Matters: Comic Tradition in India*, Chicago: University of Chicago Press.

Sinha, Parmeshwar Prasad, 1980, *Raja Birbal: Life & Times*, Patna: Janaki Prakashan.

田中於菟弥・坂田貞二（訳）、1983、『インドの笑話』、春秋社。